

4 施策2 利用者視点の社会デザイン

共創・実証スタジオ「こくりぽっく」

社会テーマ型事業を推進するためには、住民の本質的な課題を正しく把握することが重要である。欧州を中心に発展し、日本でも注目され始めている「リビングラボ」。課題に直面する地域に暮らす人々を主人公として、行政・市民・企業・大学の共創により社会課題解決にむけたサービス検討を行う共創・実証スタジオ「こくりぽっく」を紹介する。

リビングラボに取り組む意義

リビングラボとは、「Living（生活空間）」と「Lab（実験場所）」を組み合わせた言葉である。生活者の視点を取り入れた研究開発や、サービス開発、商品開発を生み出す活動であり、北欧を中心に1970年代から「参加型」の社会デザインの手法として活用されてきた。社会課題の解決は、住民自らの課題意識に基づき、様々なステークホルダーが参画し共に向き合うアプローチである。近年では、コロナ禍において英国でスポーツ観戦の規制緩和に向けて、市民が観戦者として参加する社会実験が取り入れられるなど、課題に対



株式会社NTTデータ
共創・実証 Studio こくりぽっく 実行メンバー
(左から) 安徳 普至氏・赤木 美日氏・古澤 暁子氏・水野 恵理子氏・齊藤 明子氏

して「参加型」の解決策を探る取り組みが根付いてきている。日本でも官民連携事業を創出する実験的活动的場として、自治体、NPO、大学、企業などでリビングラボの取り組み

が始まっており、徐々にその必要性が認知されている。

当社はこれまでSIerの立場で、お客様を通じてエンドユーザのニーズ理解に注力してきた。しかし、これからは、少子高齢化に伴う新たな社会保障や地域過疎、気候変動に伴い頻発する大規模災害などに対応する社会システムが必要とされる。このため、国民・住民・企業など多様なステークホルダーと直接向き合い、フラットな生活者からの視点で複雑化する社会課題を紐解く手法である「リビングラボ」に着目している。

現在、Co-CREation（共創）とPOC（概念実証）を掛け合わせた「こくりぽっく」の名称で、福岡県大牟田市と新潟県佐渡市でリビングラボ



図1 共創を起点としたサイクル

の試行を始めている。

共創実証スタジオ 「こくりぽっく」とは

「こくりぽっく」は、物理的なスタジオを構えてはおらず、地域の特性とテーマに合わせて、複数地域で展開する。各地域に密着しつつ、そこで得た知見を活かして、個別最適でなく社会全体の最適につながる「社会のしくみ」として昇華し、デジタル田園都市国家構想など国の政策も意識して、他の地域や日本全体の課題解決に役立てる。

こくりぽっくの特徴のひとつは、「まちや暮らしの理想像」を多様なステークホルダーと検討する、共創を起点としたサイクルである(図1)。このサイクルを繰り返しながら持続的にサービスを育て、その価値を地域に還元する。また、現状分析や課題抽出、アイデア出しだけでなく、実装まで取り組む仕掛けである。

福岡県大牟田市での取り組み 介護予防の地域づくり

2021年から、こくりぽっくの活動を大牟田市で開始している。大牟田市では地域に根差した活動を先駆的に行っていたNPO法人「大牟田未来共創センター」及び「地域Coデザイン研究所」と協力して、ヘルスケア領域をテーマに住民との協創を進めてきた。大牟田市の高齢化率は日本の平均(2019年10月現在28.4%)を大きく上回る約37.0%であり、高齢者の健康問題は、行政のみならず地域全体にとって課題となっている。

そこで私たちは、地域で介護に携わる病院や包括支援センターの関係者との勉強会を通じて、地域の方と



写真 第1回 佐渡市でのワークショップ

一緒に、課題の本質を捉え直す取り組みを行った。

一般に介護事業は、被介護者の要介護度が高いことが収益力となる構造である。これを逆転の発想で、健康であればあるほど事業者の収益性が高まる構造にすることで、住民が被介護者となる前から健康維持の意欲を高めるよう、政策を含めたり・デザインを検討している。健康な状態について関係者で議論した結果、健康とは「誰かに押し付けられるもの」ではなく、「自らが社会参加できていること」や、「何かをやりたいという意欲を持つことの結果として維持されるもの」と捉えなおし、「本人の力が発揮される社会(Being-well)」というビジョンを決定した。「Well-being」でなく「Being-well」としたのは、まちに暮らす人のありのまま(Being)を受け入れたうえで、意欲を育める(well)地域づくりという想いを込めて、サービスの具現化を進めている。

新潟県佐渡市での取り組み サステナブルな循環のしくみ

2022年には新潟大学との共同研究により、佐渡での取り組みを開始

した。佐渡ヶ島は自然豊かな環境から多くの恩恵を受けるとともに、生物多様性が守られる素晴らしい環境である。しかしながら、人口減少を背景とした自然荒廃や産業の縮小が進みつつある。

私たちは豊かな自然環境や生物多様性といった佐渡ヶ島の強みに着目し、これをサステナブルに将来へ繋げていくために、「まちや暮らしの理想像」の検討を進めている。

具体的には、市役所職員、地場企業・農業・漁業・林業の従事者、地元高校や新潟大学の学生と共に、全5回の連続ワークショップ(対話会)を通じ、佐渡ヶ島の現状の課題の可視化、解決策のアイデア出し・議論を行い、佐渡ヶ島が有するポテンシャルを活かした「環境循環型社会」の実現を目指している(写真)。

こくりぽっくでは、「豊かな自然」と「島」という特性を活かし、海(漁業)、里(農業や暮らし)、山(林業)のつながりや循環を意識した「サステナブルな社会のしくみ」を皆で考えることで、佐渡に暮らす人々が主人公となるプロジェクトに落としこみ、共創と実証のプロセスを回していきたい。